

聖書: ヨシュア記 19 章

説教題: 地の割り当てを終える

日 時: 2010 年 9 月 5 日

19 章は前の 18 章の続きです。ヨルダン川を渡ってカナンに入ったイスラエルは、すでに 2 部族半が川の向こう側に割り当て地を持っていましたから、こちら側に相続地を持つのは 9 部族半になります。その内、ユダ族、エフライム族、マナセの半部族の割り当て地はすでに決定しました。しかし残りの 7 部族が相続地を受け取ることに消極的でした。相続地を受けることはもちろん祝福ですが、そこには責任も伴います。彼らは割り当て地の中に生き残っている強い先住民たちを聖絶し、追い払って行かなければなりません。その困難な課題に取り組むことに対して、7 つの部族は腰が重くなっていったのです。そんな彼らにヨシュアは 18 章 3 節で「あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えられた地を占領しに行くのを、あなたがたはいつまで延ばしているのか。」と叱咤激励しました。そして部族ごとに 3 人の者を選ばせ、約束の地を再調査させました。そうして 18 章では 7 つの部族の内、ベニヤミン族の割り当て地が決定しました。そして今日の 19 章では残りの 6 つの部族の割り当て地が一気に決まることになります。

まず最初に記されているのは、2 番目にくじを引いたシメオン族。彼らの相続地の特徴は、1 節にありますように、「ユダ族の相続地の中に」あったことです。彼らは自分たち独自の割り当て地を持たないのです。良く注意してみると、彼らについては境界線が記されていません。ここからここまでは自分たちの相続地と主張できるところがなく、あちこちに住む町々が指定されているだけ。これはどうしてでしょうか。9 節に「ユダ族の割り当て地が彼らには広すぎたので」とありますが、多くの注解者が指摘するのは創世記 49 章のヤコブの遺言との関係です。シメオンとレビはご存知のように、かつて妹ディナのこと、彼女を辱めたシェケムとその町の住民を虐殺したことがありました。その事件は父ヤコブに激しいショックを与え、そのため、ヤコブは創世記 49 章の遺言の中で二人についてこう言いました。「のろわれよ。彼らの激しい怒りと、彼らのはなはだしい憤りとは。私は彼らをヤコブの中で分け、イスラエルの中に散らそう。」(創世記 49 章 7 節) この「散らされる」という預言がこのように成就したと見ることができます。シメオン族はこの結果、やがてユダ族に吸収されるようになって行きます。

次の 4 つの部族はいずれも北方に割り当て地を与えられました。この中でまず記されているのは 3 番目にくじを引いたゼブルン族と 4 番目のイッサカル族です。この二つの部族には深い関係があります。ゼブルンとイッサカルは、どちらもヤコブの妻レアから生まれた子どもたちでした。ご存知のようにヤコブの妻のレアとラケルは、それぞれの女奴隷も含めてどちらがより多く子供を産むか、出産競争をしました。そういう中、レアは 6 人の男の子を産みましたが、このイッサカルとゼブルンはレアが久しぶりに産んだ最後の二人、5 番目と 6 番目の男の子です。ヤコブの 12 人の息子たちの中では 9 番目と 10 番目にあたります。彼らは同じ母親から生まれ、年齢も近く、年下に属する者たちとして、小さい時から一緒に成長して来たのでしょう。そんなゼブルンとイッサカルは約束の地の取得においても互いに隣り合っており、一緒です。ゼブルンはメギドの平原の北側で、カルメル山の東側の地域。イッサカルはゼブルンの東側に並ぶようにして割り当て地を得ました。

5 番目のくじはアシェル族に当たりました。カルメル山から北はシドンに至るまでの地中海沿岸の細

長い地域です。ヤコブは創世記 49 章 20 節の遺言の中で「アシェルには、その食物が豊かになり、彼は王のごちそうを作り出す。」と語りましたが、その通り、ここは肥沃な土地だったようです。しかし北にはツロ、シドンの町があり、異邦人世界に接する地域として、墮落した文化の影響が濃い地域でもあったようです。

6 番目にくじを引いたナフタリ族は、今のアシェル族と並行するその内陸の地を相続しました。同じように南北に細長く伸びる地域です。そこは後の新約時代の重要な町、カペナウム、カナ、ベツサイダを含む地域でした。イザヤは後にメシヤの祝福を語る際、イザヤ 9 章 1 節で「先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。」と語りますが、まさにその「異邦人のガリラヤ」と呼ばれる地域がここです。

最後 7 番目にくじを引いたのは 40 節から記されているダン族です。彼らが割り当てられた地域は、今見た 4 つの部族よりずっと南側のエルサレムと地中海の間の地です。そこにはアヤロン、エクロンなどの町があり、ペリシテ人をはじめ強い民族が住んでいました。そのため彼らはこの地を自分たちのものにすることができなかつたようです。ヨシュア記の次の士師記 1 章 34 節を見ると「エモリ人はダン族を山地のほうに圧迫した。エモリ人は、彼らの谷に下りて来ることを許さなかつた。」とあります。それで彼らは後にずっと北方のレシエムに上って行って、その町を攻め取り、そこにダンという名を付けました。

こうした後、ヨシュアが最後に自分の相続地を受けます。49～50 節：「この地について地域ごとに、相続地の割り当てを終えたとき、イスラエル人は、彼らの間に一つの相続地をメンの子ヨシュアに与えた。彼らは主の命令により、ヨシュアが求めた町、すなわちエフライムの山地にあるティムナテ・セラフを彼に与えた。彼はその町を建てて、そこに住んだ。」ここを読んで受けるインパクトは、何と言ってもヨシュアが全部族の割り当て地の決定後に、自分の割り当て地を受けたということでしょう。しばしば指導者は自分の利益をまず確保したり、優先しがちです。しかしヨシュアは皆の相続地が決定してから、自分が受け取る地を申し出ました。何という謙遜、忍耐、寛容の姿を私たちはここに見るでしょうか。このような彼だからこそ、イスラエルをここまで導くことができたのだ、と改めて敬服させられます。

と同時に広い視点で見る時、さらにどんなことが言えるでしょうか。この約束の地の分配作業は、14 章のカレブから始まりました。そして各部族への割り当てがなされた後、このヨシュアに関する記事で終わっています。約束の地を受け継ぐ記事はカレブに始まり、ヨシュアで終わると枠組みになっています。このことは改めて民数記 13～14 章の出来事を思い起こすようにと私たちを導きます。ご存知のように民数記 13 章で、モーセは約束の地を偵察させるために 12 人の斥候を遣わしました。行って見て来た 12 人は、その地は乳と蜜が流れている素晴らしい地です！と報告しつつも、その内 10 人は「私たちはそこに攻め上れない。そこには背の高いネフィリム人、アナク人がいて、私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう！」と言って、民の心をくじきました。そんな中、カレブとヨシュアだけが、「私たちはぜひとも上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから。」とか「主にそむいてはならない。主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」と言いました。そして主は当時 20 才以上の者では、このカレブとヨシュアのみが約束の地に入ることができる、と言われました。その二人がその記事の最初と最後に来ているのです。このことは、この約束の地の受け取りは信仰による出来事として考えられなければならないということ

示しています。

カレブとヨシュアはここでも信仰によって歩んでいます。カレブは 14 章でアナク人の町ヘブロンを願い出て、そこにいたアナクの 3 人の息子たちを追い払い、そこを自分の町としました。ヨシュアも今日の章でティムナテ・セラフを受け取り、その町を建てて、そこに住みました。ここはエフライムの山地にある町であり、かつてヨセフ族が文句を言った地域です。こういうヨシュアとカレブの姿に見習って、イスラエルはこの地を自分のものとして行かなければならないのです。

そしてもう一つ、ここにある大切なメッセージは、主は約束を確かに成就される方だということです。50 節に「主の命令により」とあります。主はヨシュアとカレブが必ず約束の地に入り、自分の相続地を持つ、と約束されました。その主の約束あるいは命令が本当にここで実現に至りました！この日に至るまでには長い年月が経過しました。イスラエルは先ほど見た民数記 13～14 章の出来事の後、荒野を 40 年間もさ迷わなければなりませんでした。その間、20 歳以上の者は一人また一人と死んで行きました。そういう中でカレブとヨシュアだけが生き残りました。そしてこのカナンの地に入ってから激しい戦いがありました。いつ命を落としてもおかしくない危険な戦いの連続でした。その中で二人の命は支えられました。そしてヨシュアは全部族に相続地を割り当てる仕事が終わってから自分の相続地を得ようと思っただけでしたが、なかなかイスラエルの各部族が動きません。約束の成就を妨げるように見える困難はたくさんありました。しかしヨシュア記 1 章で「あなたとともにいる」と約束された主はずっとヨシュアと共について下さって、ついにこの仕事を成し遂げさせて下さったのです！そして全部族への割り当て地をついに決めることができ、ヨシュア自身も約束通り、相続地を受け取りました。ここには主が約束に真実な方であることが静かに、しかし何と力強く、示されていることでしょうか。

このように時至って必ず約束を果たして下さる真実なお方の前で、私たちは自分の生活を考えたいと思います。私たちの前にも様々な困難があるかもしれません。そういう中で主を信じたところで何の変化があるかと思うかもしれません。しかし改めて問われるのは、私たちは現実の困難ばかりを見つめて、私たちには無理だ、不可能だ、とあきらめるかつての 10 人の斥候たちの道に行くのか、それとも目の前の困難は大きくても、共にいて御言葉を下さっている主の約束に信頼するヨシュアとカレブの道に行くのか、ということです。今日の章で私たちが見ることは、主を信じて歩んだこの二人の歩みは大きく報われたということです。イスラエルの 12 部族が、乳と蜜の流れる地を自分のものとして受け継ぐというまさかの奇跡が本当に実現し、ヨシュアとカレブに対する主の約束も本当に実現した！ですから主を信じる歩みがむなしく終わることは決してないのです。色々な困難が前にあっても、主がそれらを乗り越えさせて下さる。道を開き、約束を果たし、その成就の日を必ず来たらせて下さる。その主に信頼して、私たちも自分の前にある状況をただ人間的な目で見れば判断するのではなく、主の御言葉の約束に照らして考え、主に信頼する歩みへ進みたいと思います。あの 10 人の者たちのようではなく、どこまでも主に信頼したヨシュアとカレブの道に行くことを祈り求めたい。その時、私たちは今日の章のヨシュアのように、主が約束下さった最善の祝福を必ずや自分のものとさせて頂くことができるのです。